

日系社会研修の成果と研修員の日系人としてのアイデンティティ観 ブラジルに焦点を当てて

著者	東田 吉子, 石川 苑子, 大淵 律子
雑誌名	佐久大学看護研究雑誌 = Saku University journal of nursing
巻	13
号	1
ページ	51-59
発行年	2021-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1050/00000279/

活動報告

日系社会研修の成果と研修員の 日系人としてのアイデンティティー観 ブラジルに焦点を当てて

Outcomes of the Training Program for Society of
Japanese Descendants and Trainees' Identity as
Japanese Descendants Focused on Brazil

東田 吉子^{*1} 石川 苑子^{*2} 大淵 律子^{*1}

Yoshiko Tsukada, Sonoko Ishikawa, Ritsuko Obuchi

キーワード：ブラジル，高齢者ケア，日系移民，日系人としてのアイデンティティー
Key words : Brazil, Care for Seniors, Emigrants of Japanese Descendants,
Identity as Japanese Descendants

Abstract

From 2017 to 2019, Saku University implemented a program for the descendants of Japanese emigrants to Brazil working in the health and medical professions entrusted by JICA Yokohama. The program was titled "Community Health, Medicine and Welfare Program—Methods for using Existing Social Resources for Care for Seniors." Elements of the program included reference to the historical background of the Japanese government's migration policy from the prewar period to around 1970. Descendants of Japanese emigrants to Brazil currently number around two million. Brazil is aging rapidly, but the social security system and care services for seniors have not kept pace with this demographic change. A report on JICA, 2016 survey noted that seniors of Japanese descendants in Brazil have limited communication ability in Portuguese and that there is a lack of caregivers for these people.

Aim: To learn about actual conditions for seniors needing care and the care system, and use learning to improve care for seniors in Brazil.

Method: A one-month training program (lectures, simulation, observation)

Result: Trainees learned about implementation of regional comprehensive care such as seamless care from hospital to home, multi-disciplinary linkage, various community programs and so on. In their final reports, they identified applicable ideas and activities. Trainees also affirmed familial roots after they arrived in Japan, and through exposure to Japanese tradition and culture, deepened their identity as descendants of Japanese emigrants.

受付日2020年10月1日 受理日2021年1月13日

*1 佐久大学看護学部 Saku University School of Nursing

*2 佐久大学国際交流教育センター Saku University International Exchange and Educational Center

要旨

佐久大学では、日系中南米諸国の保健医療職を対象とした「地域保健医療福祉—既存の社会資源を要介護高齢者へ活かす手法」研修を2017年～2019年までJICA横浜から受託し実施した。

研修の背景には、戦前から戦後1970年代まで続いた日本の集団移住政策がある。2018年、ブラジルの日系人推定人口は約200万人である(外務省, 2018)。ブラジルでは、高齢化が急速に進んでいるが高齢者を支えるための社会保障制度、介護システムが未整備である。2016年のJICA調査によると日系高齢者について、語彙が少なく限られたポルトガル語力、介護力不足等の課題が報告されていた。

研修目的: 日本の地域における要介護高齢者へのケアの実際及びケアシステムについて学び、自国の高齢者ケアの改善に資する。

方法: 1ヶ月間の研修(講義、演習、見学)

結果: 研修員は日本の地域包括ケアの実践について理解し、病院から在宅へのケアの継続、多職種連携、地域活動等について自国で応用できる活動をまとめた。また、日本に来て改めて家族のルーツを実感したり、伝統、文化に触れ日系であるアイデンティティー観を深めていた。

I. 緒言

本研修は、(独)国際協力機構横浜センター(Japan International Cooperation Agency, Yokohama Center: 以下JICA)の委託により、日系中南米諸国の保健医療職を対象に2017年～2019年(3ケ年)まで実施された(表1)。

一般に「日系人」とは、海外に移住した日本人と彼らの子孫をさす(石田, 2009)。

1. 日系移民に関する歴史的背景

1970年代に至るまで、日本から北米・南米大陸をはじめとする国々へと大規模な移住を促進する政策が存在していたことは、今日、多くの日本人に忘れられつつある(サンパウロ人文科学研究所, 2020)。ブラジルへの移民開始は1908年で最初の移民船笠戸丸が781名の移民を乗せてサントスへ到着した(外務省, 2008)。戦前は移民と言われたが、戦後は移住という用語が使用されている(外務省, 2015)。当初は、契約労働者としての出稼ぎで帰国が前提であったが、契約終了後に土地を購入し独立する人が現れ、1910年以降、「集団移住地・集団独立移住地」と言われる邦

人移住地が創設されていった(中山, 2014)。戦後は1952年に移住が再開された。移住再開について池田(2010)は、第二次世界大戦終了後、アジア諸国から多くの引揚者が帰国してきたが、疲弊していた日本国内の経済状況下で失業者が多く、その解決策の1つが移住であったと述べている。一方、子安(2015)は、戦後日本の復興期(1947年～1950年)に海外から支援を受けたLARA(Licensed Agencies for Relief in Asia)救援物資はブラジル、中南米等の日系移民の善意が含まれていると述べ、日系移民と祖国との関係に触れている。

国内の移住者募集は、行政組織、農協組織が関わりブラジルの大地で農業改革に取り組んだ。1955年～1966年の間にブラジル、サンパウロ州コチアへ移住した青年は、2,507人、そのうち長野県出身者は92人であった(全国農業協同組合中央会, 1984)。

1963年には「移住および植民に関する日本国とブラジル合衆国との協定」が発効され、それぞれの利益に合致する形で国際協力の精神に基づいた適切な政策を実施することと明記されている(外務省, 2015)。

1959年、移民のコロニア(サンパウロの日

系社会)代表者により現・サンパウロ日伯援護協会が設立され(ニッケイ新聞, 2019)、日伯友好病院、特別養護老人ホーム、自閉症療育施設等が設置された。現在、同協会は日系人、非日系人の患者、入所者を受け入れており、2020年度の方針として、「高齢者及び社会的弱者の救済救援」事業の充実を挙げている(ニッケイ新聞, 2020)。

2. ブラジルの医療・高齢者ケアに関する法律

1988年: 公的医療保険・統一医療システム(SUS: Sistema Único de Saúde)施行(公立病院での医療費を無料とする)

2012年: 老人保健施設及び療養病棟の設置

2016年: 介護士を職業として法的に規定

3. 高齢者ケアに関するブラジルの現状

近年ブラジルの高齢化は急速に進み、65歳以上の高齢化率の割合は2020年13.7%、2030年19.8%、2040年には26.8%に増えると予測されている。保健衛生の向上や女性の社会進出に伴う出生率の低下によるが、現在のブラジルの経済状況では、十分に豊かになる前に老いる可能性が高いと述べている(楳加藤, 2015)。

4. ブラジルにおける高齢者の課題

2016年1月、JICAはブラジルへ調査団を派遣し高齢者の状況を把握した。下記の課題は調査報告書(北澤, 征矢野, 川端, 江本, 2016)からの抜粋である。

- 1) 高齢者の保健福祉について標準化した社会制度が確立されていない。
- 2) 高齢者対策は国の重点課題として取り上げられておらず、高齢者政策は一部の活動に留まっている。たとえば、元気な高齢者向けの健康増進・生きがい支援プログラムは充実し、また寝たきり高齢者へ

の訪問診療は一部実施されている。しかし、日常生活や外出に介助を要する要支援高齢者向けのサービスは存在しない。

- 3) 日系老人ホームは経営難に陥っており、組織の黒字部門からの補填や、キリスト教関係者等からの寄付によりなんとか経営を続けている状態である。
- 4) 老人ホームの介護スタッフは、非日系人の無資格・無経験者が多く、日常的な介助(おむつ交換、着替え、入浴等)の知識、技術が不十分なまま介護が行われている。また、老人ホームや元気な高齢者向けのプログラムには、医師、理学療法士、臨床心理士等、日本よりもはるかに多種類の専門職種が従事しているが、職種間の連携が乏しく、各々の専門性が発揮されにくい状況にある。
- 5) 南米では高齢者の保健医療福祉の専門職種でも「認知症ケア」については経験の少ない分野であり、実践・体験による研修が急務となっている。
- 6) 点在する日系高齢者が共助により生活を自立する支援(たとえば送迎サービス付きの介護予防プログラム、高齢者向けの寄り合い住宅)が必要である。

5. 海外移住者のアイデンティティの再認識について

研修員らは日系二世、三世であった。福井(2003)は日系人としての認識について、移民一世は、自分は日本人であることを強く認識しているが、二世以降の子孫は現地への「同化」の進展と「祖国日本」の狭間でアイデンティティが問題になり、1)日本人としての意識を保持する、2)移住先に同化する、3)同化しつつ日本人を意識する、の三点が見られるとし、比嘉(2002)は日本に滞在して国籍や出身地、言語を自らの一部として主張し、日系と認識するようになると述べている。

6. アイデンティティーの定義

自己同一性などと訳される。自分は何者であるか、私がほかならぬこの私であるその核心は何かという自己定義がアイデンティティーである(ブリタニカ百科事典)。

II. 研修概要

1. 研修期間: 毎年1ヶ月間(11月初旬～12月初旬、2017年～2019年)

2. 研修内容: 最初の1週間は高齢者の保健医療・福祉システム等の基礎的な講義及び東京の健和会医療グループにおける都市での研修、続く2週間は、佐久市及び周辺の地域特性の理解と高齢者ケア(介護予防、在宅ケア、施設ケア、多職種連携、リハビリテーション、認知症ケア、終末期ケア)の実践を理解する研修、最後の1週間は、研修成果を基に自国の高齢者ケアに向けたアクションプランの作成と発表を行った。

3. 研修員の資格条件

- 1) 医療、保健、福祉分野に従事する者
- 2) 日系関連団体の施設等で、高齢者が集まるサロンやデイサービス等を企画、運営する意欲のある人(資格は問わない)
- 3) 老年学を学ぶ大学院生
- 4) 2年以上現職にいたることが望ましい
- 5) 日本語能力試験N3～N4程度で日常的な英語を理解できること

4. 研修員の選出方法

研修の受入れ定員は5人～8人である。上

記の資格条件に基づき、研修員の現在の業務と本邦研修内容との整合性、帰国後に日本での研修経験を如何に活かすことができるかという観点から、3回の審査(JICA サンパウロ事務所、JICA 横浜、佐久大学)を経て研修員が選出され、JICA サンパウロ事務所を通じて本人へ合否が連絡される。帰国後、研修で得た学びを所属組織や地域活動に広く生かすことが推奨されている。

5. 研修で期待される成果目標(習得する知識・技術)

JICA 調査団の報告書に基づき、下記の研修目標を設定した。

- 1) 日本の高齢者保健・医療・福祉のシステム及び認知症ケア、在宅ケアの歴史的背景と現状を理解し、自国の高齢者対策と比較できる。
- 2) 自治体、地域における高齢者ケアへの取り組みを理解し、自国と比較できる。
- 3) 高齢者施設の運営、管理方法及び高齢者用住宅の利便性について理解する。
- 4) 高齢者の持てる力を活かす自立支援のケアについて理解し、応用できることを計画する。
- 5) 都市部と農村部における地域医療の実際、訪問診療・訪問看護・訪問リハビリテーション・訪問介護等の包括的な展開過程に基づく地域包括ケアを理解する。
- 6) 介護予防事業及び介護予防技術について理解する。
- 7) 住み慣れた地域で家族と暮らしながら終末期を迎えるための「看取りケア」のシステム及び環境づくりについて学ぶ。
- 8) その人の人格を尊重した認知症ケアの実

表1 研修員の人数と職業

年	人数	参加者の職業(カッコ内は人数)
2017年(第1回)	8人	医師(3)、看護師(3)、社会福祉士(1)、ヘルスコンサルタント(1)
2018年(第2回)	6人	医師(2)、看護師(2)、公衆衛生士(1)、栄養士/組織の管理職(1)
2019年(第3回)	5人	医師、看護師、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士(各1)

表2-1 研修成果を基にしたアクションプランとアイデンティティー観(2019年度)
(研修成果は前述の「研修で期待される成果目標(習得する技術)の番号と同じ」)

成果目標	研修施設・プログラム	研修員の理解、日系人としてのアイデンティティー観	プログラム上の工夫、アクションプランへの適用(2019年度)
1)	<p>基本的な理解 講義: 日本の保健医療福祉システム、医療保険・介護保険、高齢者ケア施設の種類の、高齢者の全人的理解について、日本の高齢者ケアの歴史、介護福祉士のキャリアキュラム、認知症ケアのあゆみ、認知症高齢者へのアプローチの方法</p> <p>研修員の発表: ジョブレポート(自国における各人の業務、責務、自身の活動等)の発表 2019年の発表: ・地域の中核的病院 ・市町村のポリ・クリニックにおける言語聴覚士の業務 ・日系特別養護老人ホーム「憩の園」の活動 ・UNIMED(ユニメッド)医療協同組合の活動</p>	<p>1) 日本では介護保険に基づき大都市と地域の保健医療サービスが同じように提供されている。 2) 介護保険により要支援・要介護の高齢者がサービスを受けている。 3) 自国でも介護を専門職として教育すべきである。 4) ジョブレポートの自己紹介は両親、祖父母の日本の出身県から始まり、研修員の家族、地域や人々の生活の様子から日系であるアイデンティティーを披露(自宅や地域の日本庭園、地域の日本の祭、子供達の日本名の継承等) 5) 「憩の園」は日系人としてのアイデンティティーを大事にしたいという強い思いのもと日系人のみの入所者を受入れており、日々の活動では習字、お花、折り紙等が紹介された。 憩の園の使命: 高齢化に伴いお年寄りにどんな障害が現れても各自が認められ、愛され、その可能性を活かして最後までその人らしく生きられるよう、よい環境作りに専念する。</p>	<p>・施設訪問の前に講義を入れ、日本の保健医療システム、介護保険について理解を促した。ブラジルには、存在しない介護保険制度と要支援、要介護サービスについて具体的に理解するための時間を確保した。(横浜市発行の介護保険制度(ポルトガル語)を配布した他、講義資料は全てポルトガル語へ翻訳し、ポルトガル語の通訳が付いた。) ・研修員は、日本とブラジルの保険の違い、及びブラジルの組織は縦割りであり、治療とリハビリテーションの継続性がないことに気づいた。 ・研修員はこの研修に参加することを機に初めて出会った人達であり、研修員間の相互理解の場となった。また、JICA横浜や佐久大学の関係者が一堂に会し、研修員の各々の背景をふまえた研修目標の達成に向けて本邦研修経験の活かし方を理解する場となった。</p>
2)	<p>自治体、地域の高齢者ケア(佐久市、上田市) 講義: 佐久市高齢者対策 佐久市行政事業(転倒予防、骨太健康教室、脳トレーニング、シルバーランドみつゝい(ミュージック・セラピー)、ローマンうえだ(高齢者サロン)</p>	<p>1) 多種類の地域活動が実施されており、高齢者のニーズに合わせたアイデアを自国のケアに応用可能である。 2) サロンでは、日本の高齢者と直接接することで自らの日系としてのルーツを実感し、懐かしさ、親しみやすさを感じ、地域特有の茶菓子などからも日系のアイデンティティー観を強く感じていた。</p>	<p>・高齢者ケアに対する行政の取り組み、直接実施している事業、地域のNGOへの委託事業を体験することとした。 ・研修員のアクションプランには体験した転倒予防体操、脳トレーニング、ミュージック・セラピーのいずれもが計画に取り入れられた。</p>
3)	<p>高齢者施設の運営・管理</p>	<p>1) 大都市である東京及び地方の佐久市、上田市、東御市の施設の運営管理状況について講義と視察により具体的に理解し、それぞれの地域の特徴や高齢者のニーズに合わせて工夫していることを理解していた。 2) 古民家を利用した宅老所、元農協の建物、タバコの葉の乾燥室を再利用した小規模多機能型施設やサロンを見学し、ブラジルでは既存の県人会館を高齢者施設として再利用するアイデアを得ていた。 3) 福祉施設の設備、個室の家具、トイレの安全性はその人の生活を大切に考えるQOLを高める支援であり、自立支援の環境づくりであると理解していた。 4) 全てを介助することが高齢者にとって良いことではないと高齢者の持つ機能を生かす自立支援について学んだ。</p>	<p>・既存の社会資源を生かす方法として、多額の資金をかけず、古民家等を高齢者施設へ再利用する方法、高齢者の動線を考慮した統合型の福祉施設を見学し、研修員は自国の施設に向けた建設的なアイデアを得ていた。 ・自国では、高齢者ケアシステムにおいて自宅から施設への送迎サービスが導入されておらず、現時点では計画に入れることは難しいと感じていた。 ・アクションプランでは、自国のクリニック、高齢者施設の個室、トイレ等の環境改善が取り入れられた。 ・高齢者の持っている力を活用しつつ事故予防の環境を整え、安全に日々を過ごせる「見守りのケア」について考える機会とした。</p>
4)	<p>高齢者住宅の利便性 高齢者の持っている能力を活用する自立支援へのケア</p> <p>東京都足立区: 健和会医療グループ高齢者ケア施設 佐久市: 恵仁会医療グループ宅老所 上田市: ジェイエー長野会ローマンうえだ高齢者ケア施設及びサロンの建物 東御市: ケアポートみまき(保健医療福祉統合型施設)</p>	<p>1) 大都市である東京及び地方の佐久市、上田市、東御市の施設の運営管理状況について講義と視察により具体的に理解し、それぞれの地域の特徴や高齢者のニーズに合わせて工夫していることを理解していた。 2) 古民家を利用した宅老所、元農協の建物、タバコの葉の乾燥室を再利用した小規模多機能型施設やサロンを見学し、ブラジルでは既存の県人会館を高齢者施設として再利用するアイデアを得ていた。 3) 福祉施設の設備、個室の家具、トイレの安全性はその人の生活を大切に考えるQOLを高める支援であり、自立支援の環境づくりであると理解していた。 4) 全てを介助することが高齢者にとって良いことではないと高齢者の持つ機能を生かす自立支援について学んだ。</p>	<p>・既存の社会資源を生かす方法として、多額の資金をかけず、古民家等を高齢者施設へ再利用する方法、高齢者の動線を考慮した統合型の福祉施設を見学し、研修員は自国の施設に向けた建設的なアイデアを得ていた。 ・自国では、高齢者ケアシステムにおいて自宅から施設への送迎サービスが導入されておらず、現時点では計画に入れることは難しいと感じていた。 ・アクションプランでは、自国のクリニック、高齢者施設の個室、トイレ等の環境改善が取り入れられた。 ・高齢者の持っている力を活用しつつ事故予防の環境を整え、安全に日々を過ごせる「見守りのケア」について考える機会とした。</p>

表2-2 研修成果を基にしたアクションプランとアイデンティティー観(2019年度)

成果目標	研修施設・プログラム	研修員の理解、日系人としてのアイデンティティー観	プログラム上の工夫、アクションプランへの適用(2019年度)
5)	地域包括ケアについての理解 急性期病院・リハビリテーション病院又は老人保健施設・在宅ケア(訪問診療・訪問リハビリテーション・訪問看護・ヘルパー派遣による家事支援)	1) 東京と佐久市周辺の医療施設において急性期病院からリハビリテーション病院、又は介護保険施設、そして介護保険サービスを在宅で受ける継続的なケアシステムを理解した。 2) 佐久総合病院・小海分院では、「故人を偲ぶ会」に参加し、一人一人の人間性を尊重するケアは、家族のグリーフケアにもつながり、ここに日本人の持つ死生観があると感服し、改めて日系人としてのアイデンティティーを見出したと述べていた。 3) 在宅ケアへの同行研修により多職種連携の方法を患者宅に置かれた連絡ノートや担当者会議において学んだ。	・リハビリテーションにより自立支援をする大切さに気づき、リハビリテーションを治療に追加する計画をアクションプランに取り入れた。 ・故人を偲ぶ会で体験したグリーフケアに感服し、アクションプランに取り入れられた。 ・家族と多職種間をつなぐ連絡ノートは、施設ケアにおける引き継ぎノートとして取り入れられた。 ・担当者会議について説明を受け、介護職が現在、専門職会議に参加していない特養の「憩の園」で、今後介護士を担当者会議に加えることがアクションプランに入れられた。
6)	介護予防事業／介護技術習得 東京都足立区：健和会医療グループ高齢者ケア施設 上田市：鹿教湯病院(専門職別の研修) ジェイエー長野会ローマンうえだ高齢者ケア施設	1) 医師、看護師、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士と多職種が研修に参加しており、それぞれの専門分野を生かした個別研修と情報交換ができたこと、プログラムを評価していた。 2) ブラジルにおいて急速に高齢化が進む中で、ケアの質に関わる介護職が専門職として位置づけられることを希望していた。	・訪問した多くの施設で様々な介護予防事業を見学し、鹿教湯病院では、それぞれの職種(医師、看護師、理学療法士、作業療法士)別にリハビリテーション技術について学ぶセッションを設けた。 ・早期リハビリテーションの方法はアクションプランに取り入れられた。
7)	看取りのケア 訪問診療・訪問看護による自宅での看取り(佐久総合病院) 施設での看取り(ジェイエー長野会ローマンうえだ)	1) 研修員は、ブラジルでは、自宅での看取りは、本人が希望してもまだ受け入れられず病院での看取りが100%であると述べた。 2) 看取りが自宅や施設で行われている日本の状況を理解し、自国の将来の選択肢であると述べた。	・看取りについて、当事者である医師、看護師から状況を聞いて学ぶことができていた。また、施設では偶然、看取り後の「お別れの会」に、故人の家族の許可を得て共に立ち会うことができ、実情を理解できていた。
8)	認知症ケア 講義とケアの実際を見学 佐久市：ジェイエー長野会グループホーム新子田の家 上田市：ジェイエー長野会「ローマンうえだ」グループホーム、サロン	1) グループホームを見学し、認知症の人の持てる力を活かしながら生活する1日の過ごし方とスタッフの関わり方について具体的に理解できていた。 2) 「ローマンうえだ」では、周囲の人のサポートにより認知症になっても地域で安心して暮らしていけることが実践されている様子を見学し、認知症の人が主体になれる先駆的なケアとして理解された。	・ブラジルでは認知症ケアは、未だ新しい領域であり、薬や対応方法について研修員から質問があったが、地域で認知症の人が自分らしく生きていける支援の方法を見て、その人の人格を尊重し、薬に頼らず拘束しないケアについて、新しい認知症ケアの方法として理解していた。

際について学ぶ。

した(カッコ内は人数を表す)。

6. 研修後のアクションプランの内容

各研修員は下記の項目について、実施場所、職種、実施回数、期間、責任者、評価の方法等についてアクションプランにまとめ、発表

- 1) 健康増進、介護予防活動(脳トレーニング、骨折予防体操、口腔体操、栄養指導、肺炎予防に向けた嚥下指導等) (5)
- 2) 認知症高齢者への介入(センターアプローチと呼ばれる当事者中心のケア方法)

および地域での接し方(3)

- 3) デイサービスプログラムへ参加した高齢者をフォローする(1)
- 4) 治療を終えたあとの回復期リハビリテーション及び退院後の生活リハビリテーションの推進(4)
- 5) 多職種間連携用のノートの活用及び多職種間の在宅ケア担当者会議の実施(2)
- 6) 介護者である家族の健康について気を配る活動(1)
- 7) 看取りについて、家族と医療職が話し合う(1)
- 8) ブラジルの在宅ケアにおいて、高齢者ケアへ重点を置く(1)

7. 研修目標の達成に対する自己評価

研修員は、修了時に研修プログラム全体について次の4段階で研修目標の達成に対する自己評価を行った。1)十分達成できた、2)達成できた、3)あまり達成できなかった、4)達成できなかった

2017年度は、全員8人(100%)が十分達成できたと回答した。2018年度は、十分達成できた5人(83.3%)、達成できた1人(16.7%)、2019年度は、十分達成できた4人(80.0%)、達成できた1人(20.0%)で全体に研修員の主観的満足度が高かった。理由の一つとしては、研修はポルトガル語の通訳付きであったが研修員はある程度日本語で会話ができるため、ケアの実際を現場から良く理解することができていたことがあげられる(自己評価は研修のまとめとして研修員の合意を得て実施した)。

8. 考察

ブラジルの高齢化率(65歳以上)は2020年13.7%と低い、研修員の多くは、所属先や地域で要支援高齢者、認知症高齢者が散見されていると述べていた。今後のブラジルにおける高齢者の状況は、日本に追随することは

確かであると感じられた。

研修員は日本とブラジルの現状の違い、例えば①ブラジルでは未だ高齢者ケアが国の重点政策になっていない、②医療施設におけるケアが縦割りであり治療とリハビリテーションのつながりが無い、③施設や在宅での看取りは、本人が希望しても現在は実現が難しく病院へ搬送される等について認識できていた。両国の違いの中からどのような改善がブラジルの現場に受け入れられるのか、帰国後はアクションプランを関係者へ丁寧に説明し、日本で学んだ多職種連携によるチームで取り組む活動の実践が求められている。

JA長野厚生連佐久総合病院・小海分院で「故人を偲ぶ会」に参加した研修員は、この会は故人の尊厳を敬う日本の伝統をベースにした死生観であり日系人として継続していきたいと述べた研修員が多かったが、ブラジルの風土に適した応用を再考することが示唆された。

ブラジルでは介護士が専門職であることについて、人々の認識が低く、日系特別養護老人ホーム「憩の園」では介護士が専門職会議に入っていないため患者の情報共有に課題が見られるなどが研修員から報告され、今後、高齢者ケアに関わる質の高い人材育成・多職種連携の促進が必要であると思われた。

研修員らはブラジルで生まれ育った日系二世、三世である。これまで現地へ同化して生活していたが、比嘉(2002)が指摘したように日本に滞在して祖父母の出身地を身近に感じ、研修中に祖父母と同年代の高齢者と交わることで言語、生活感、祖父母から歌い継がれた歌、和食等に触れ自身が日系であるという認識を深めていた。三田(2002)は日系人はブラジルでは「ジャポネス」であるが、日本では「ブラジル人」あるいは「日系ブラジル人」と述べているが、研修員達から同様のことが語られた。研修員の多くが日系であることを誇りに思い、自国の日系高齢者ケアの改善

に尽くすと述べていた。

Ⅲ. 結論

研修員は、高齢者対策の先進国である日本の地域包括ケアシステムを学ぶ中で、ブラジルに適用できるプログラムを取捨選択し、短期長期のアクションプランにまとめることができた。高齢者対策は長期に渡って必要であり、今後もブラジルへの支援が必要である。

日本財団が実施した世界規模の「日系人」意識調査(2020)では、アイデンティティーを形成する上で、最も影響を与えた日本的な価値観は、複数回答で「頑張る、尊敬、正直、感謝、我慢」であった。研修員らの研修中の姿勢を通して同様の価値観が感じられた。

謝辞

研修にご協力を頂きました保健医療福祉施設、講師、訪問させて頂きました各ご家庭、地域のみなさまには、研修目標をご理解頂き、研修員を温かく迎え、研修後の活動について励ましの言葉をかけて頂き、深謝の念に堪えません。また、通訳の佐藤美穂子氏は、自身が移住家族であり日本へ研修員として来日した経験を活かしてブラジルと日本社会を理解した上で実用的な通訳業務を行っていただき、研修員に大きな安心感を与えて下さいました。改めて感謝申し上げます。

開示すべき利益相反(COI)はない。

文献

福井千鶴(2003). 南米移民と日系社会—日系人のアイデンティティーを中心に—. 地域政策研究, 5(3), 35-52.
外務省(2008). 笠戸丸と初期移民, 2020/7/13, https://www.mofa.go.jp/mofaj/annai/honsho/shiryo/j_brazil/03.html

外務省(2015). 日本とブラジルの120年展示史料解説, 2020/7/15, <https://www.mofa.go.jp/mofaj/files/000104725.pdf>

外務省(2020). ブラジル連邦共和国基礎データ, 2020/7/21, <https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/brazil/data.html>

比嘉マルセーロ(2002). 第七章アルゼンチンにおける「日本人」の諸相について—日本への「出稼ぎ」移住と移民の子孫のアイデンティティー志向の変遷を中心に—. 柳田利夫編, ラテンアメリカの日系人—国家とエスニシティ. 290-293. 慶應義塾大学出版会.

池田碩(2010). ブラジル移民の研究—移民家族がたどった「史的モノグラフ」からの考察—, 総合研究所報, 18, 37-86.

石田智恵(2009). 〈日系人〉というカテゴリーへの入管法改正の作用—1990年以降の出稼ぎ日系人に関する研究動向—. Core Ethics, 5, 427-434.

子安昭子(2015). 日本・ブラジル関係史120年 相互補完を超え「共に(Juntos)」へ. 国際問題, 645(39), 38-50.

北澤彰浩, 征矢野あや子, 川端慎介, 江本佐保子(2016). ブラジルにおける日系高齢者ケアに係る現地セミナー実施及び支援のための情報収集調査報告書.

楨絵美子, 加藤麻衣(2015). ブラジルの健康保険制度: 統一医療システムSUSと民間健康保険SHI. 損保ジャパン日本興亜総研レポート, 66(3), 47-74.

三田千代子(2002). 第六章ナショナリズムとエスニシティ・グローバリゼーションとエスニシティ. 柳田利夫編, ラテンアメリカの日系人—国家とエスニシティ. 213-243. 慶應義塾大学出版会.

中山寛子(2014). 日本の海外移住の送出形態に関する一考察: 移住の国策化と「集団移住」. 法政大学国際文化学部 異論化論文編. 15, 113-136.

ニッケイ新聞(2019). 援協創立60周年盛大に

- 祝う = 32人から2千人超に発展 = ブラジル
全体の医療福祉に貢献. 2020/7/16,
[https://www.nikkeishimbun.jp/2019/
190817-alcolonia.html](https://www.nikkeishimbun.jp/2019/190817-alcolonia.html)
- ニッケイ新聞(2020). 未来を見据えて事業拡
充 = 皆様のおかげで安定した運営 = 60周
年迎えた援協の活動概要. 2020/7/21,
[https://www.nikkeishimbun.jp/2020/
200101-81especial.html](https://www.nikkeishimbun.jp/2020/200101-81especial.html)
- 日本財団(2020). 日本財団グローバル若手日
系人調査概要レポート, 2020/8/31,
[https://www.nippon-foundation.or.jp/app/
uploads/2020/08/who_pr_20200831_01.pdf](https://www.nippon-foundation.or.jp/app/uploads/2020/08/who_pr_20200831_01.pdf)
- サンパウロ人文科学研究所. ブラジル日系移
民, 2020/7/14,
<https://cenb.org.br/articles/display/86>
- 全国農業協同組合中央会(1984). 30年史.
233-237, 369-370. 全国農業協同組合中央会.